

あとがき

苦吟を重ねながら、やっと脱稿にこぎつけた。みんなの寝静まった深夜、マンションの小さなベランダに出て北方の空を望むと、正面の彼方に、北極星が光っていた。立ち上がって、二階の軒先ごしに視線を広げると、北斗七星が悠然と、地上を見下ろしている。

「あなたはプレアデスの鎖を結ぶことができるか。オリオンの綱を解くことができるか北斗とその子星を導くことができるか。あなたは天の法則を知っているか。そのおきてを地に施すことができるか」

最近、読みはじめた旧約聖書の「ヨブ記」の一節が浮かんできた。そんなことは、とてもできません、と答えるしかない。

確かに、この地上における二十世紀は、「戦争の世紀」「対立の世紀」だった。今世紀の前半には、二つの世界大戦があった。そして、後半には米ソ両超大国による冷戦体制が続いたが、その内部でも亀裂や対立が起き、人々はイデオロギーや自国の利益をむき出しにして争った。そして、冷戦体制が終わっても民族や宗教上の対立から地域紛争は絶えず、さらにはインドの核実験、これに応酬するパキスタンの核実験—と「世の欲」は絶えない。天の法則を地上に施すことは、並大抵でない。

荘子の言葉に「不知之知」がある。解説書をひもとくと、こんなことが書いてある。

人間の判断は、常に相対的なものであって、絶対的な正しさなどというものはどこにも存在しない。にもかかわらず、人間は、「知」に頼り、自己の判断を絶対視し、対立してはせめぎあう。ここに知的動物である人間の、宿命的な悲劇の根がある。だが、人間が「知」を捨て去ることができぬ以上、この悲劇を絶つ途は、ただ一つしかない。それは「知」の限界を自覚して、「知」を超えることである。—これを「不知の知」という。

二十一世紀が近づくにつれて、国際情勢には「絶対」から「相対」へ、「対立」から「対話」へとといった動きも出てきた。世界は次第に多極化し、「一超多強」などという言葉も登場している。しかし、地球上にはもっとたくさんの中小国家がある。そして、その中から超大国や大国のエゴを押しとどめる知恵も出始めている。

広大なアジア太平洋地域をはさんで、米中両国間に「建設的な戦略的パートナーシップ」の構築へ向けての対話が定期化しようとしている。また、この地域に関わる日・米・中・口の大国間でも、お互いに話し合っって問題を解決しようとする機運が生じてきた。朝鮮半島をめぐるのは、恒久的な平和体制の枠組をつくるため、戦争当事者だった韓国、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、米国、中国による四者会談が始まった。そして六月下旬のクリントン米大統領の訪中後、この秋には江沢民主席が「米中サミット」の成果を携えて、わが国を訪問する。相前後して、何度も死線を乗り越えてきた韓国の金大中大統領も来日する。

世界に目を開けば、米国によるイラク攻撃を、中国、ロシア、フランスなどの支持を受けつつ、必死で食い止めたガーナ出身のアナン国連事務総長。米国からの制裁を受けつつ

けているキューバを訪問して、カストロ議長と心を開いて語り合ったローマ法皇。クリントン米大統領を迎え、かつて十七年間収容された牢獄に招き入れて来し方、行く末を語りかけた南アフリカのマンデラ大統領—これらの人々は、いずれも異なった世界を結びつけることのできる、大きな「マージナルマン」(境界人)と言えるだろう。

この地上に樂園をつくろうとすれば、超大国は大国と中小国家の、大国は中小国家の、そして国家はそこに住む人々の声に、謙虚に耳を傾けなければならない。同時に、どんな人間にも、それぞれの「生まれ」と「育ち」があったように、さまざまな国家や民族にも、それぞれの生い立ちや文化形成があったことに思いをいたそうではないか。そして、「出会い」の場を広げ、対話を重ねつつ、その中から自他共に生きる道を模索していかなければなるまい。

この手記は、もともと『留学生新聞』(麻生潤社長)の中圭一郎常務を始め、当時の趙海成編集長、方淳副編集長に依頼されて書き進めたものだった。この新聞は、日本人と中国人(台湾出身者を含む)が協力して十年前に創刊した、日本では草分けの中国語と日本語の併用紙である。

中さん、趙さん、方さんの三人は、何回も足を運んでこられた。四回、五回と雑談を重ねるうち、彼らは私の生い立ちから、中国そしてアジア諸国との関わり、ジャーナリストとしての経験談を中心に、大型連載を企画したい、と申し出した。当初は月に一回、途中から月に二回の割で、二年半近く続き(一九九三年八月一日付から九六年二月十五日付まで)、掲載は五十一回に及んだ。

連載を終えたとき、「一冊の本」として出版したいという話も出たが、とりとめもない雑文だからと言って、そのままにしておいた。

たまたま、日中国交正常化二十五周年に当たる昨年九月の一ヵ月余り前、月刊誌『潮』編集部から、「この四半世紀を振り返って、日中国交正常化にまつわる秘話を書いてほしい」という注文を受けた。その際、旧知の阿部博さん、そして新しく知り合った泉吉和さんと酒を酌み交わしながら、ふと『留学生新聞』のことを話した。すると、「ぜひ本にしたい。来年は日中平和友好条約調印の二十周年にあたるから」という申し出を受けた。

アジア太平洋地域の未来へ向けて、米中間に新たな動きが見え始め、そのはざままで日本の姿勢にふらつきが感じられる時期であった。意を決して、今年の春から、書き残したこと、新しい動きを加筆し、何とか世に問うことができた。

ここに、私を激励してくださった方々に、心から感謝の意を表したい。

この手記を、私に人間として生きる原点を教えてください、小学校四年のときに世を去った亡き父に捧げる。

一九九八年五月二十五日

著者